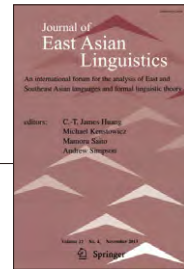


**著書紹介** Journal of East Asian Linguistics  
 Volume 22, Issue 4, Special issue on Japanese  
 Geminate Obstruents Guest Editor: Haruo  
 Kubozono Springer, November 2013

著者	窪園 晴夫
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	5
号	1
ページ	43-44
発行年	2014-06
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000766">http://doi.org/10.15084/00000766</a>

**Journal of East Asian Linguistics Volume 22, Issue 4,  
Special issue on Japanese Geminate Obstruents**

Guest Editor: Haruo Kubozono  
Springer, November 2013



窪菌 晴夫

この特集号は、世界諸言語の中でも日本語の一つの特徴とされる促音（阻害音の重子音化）をテーマに取り上げ、世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。特集に所収された三つの論文は、いずれも2011年1月に国語研の共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」が主催した国際ワークショップ GemCon（International Workshop on Geminate Consonants）での口頭発表を発展させている。

促音の「っ」は平板アクセントとならんで日本語音声の特徴とされるものであり、日本語の幼児にとっても外国人日本語学習者にとっても獲得がむずかしいとされている。上記共同研究プロジェクトは促音が頻出する外来語に主に着目して分析することにより、日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを、音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明しようとするものである。本特集に収められた次の三つの論文もこの目標を共有している。川越・竹村論文と窪菌・竹安・儀利古論文は外来語に見られる促音の生起分布をもとにその音声学的、音韻論的特性を論じ、ソヌ他の論考は日本語学習者が直面する促音の問題を分析した。

1. Kawagoe, Itsue, and Akiko Takemura. 'Geminate judgments of English-like words by Japanese native speakers: differences in the borrowed forms of "stuff" and "tough"', 307-337.
2. Kubozono, Haruo, Hajime Takeyasu and Mikio Giriko. 'On the positional asymmetry of consonant gemination in Japanese loanwords', 339-371.
3. Sonu, Mee, Hiroaki Kato, Keiichi Tajima, Reiko Akahane-Yamada and Yoshinori Sagisaka. 'Non-native perception and learning of the phonemic length contrast in spoken Japanese: training Korean listeners using words with geminate and singleton phonemes', 373-398.

このうち Kawagoe & Takemura の論考は、(1) のような外来語のペアに見られる促音の不思議な生起現象に注目し、なぜ staff, flag に知覚される促音が tough, lag に知覚されないのかという問題を音声手法により考察した。日本語に観察される両者の違いは、英語の発音に含まれる音声特徴により現れるものではなく、/st/, /sn/, /θ/ といったオンセット（頭子音）の音韻論的複雑さ（phonological complexity）に起因するものであるという結論を導き出している。

- (1) スタッフ (staff, stuff) vs. タフ (tough)  
スノッブ (snob) vs. ノブ (knob)

フラッグ (flag) vs. ラグ (lag)

フロッグ (frog) vs. ログ (log)

Kawagoe & Takemura の論考が頭子音の複雑さに起因する促音の不均衡性に着目したのに対し、Kubozono et al. の論考は語末と非語末という語内部の位置の違いに観察される促音の不均衡な生起 (2) を分析した。

(2) ドック (dock) vs. ドクター (doctor)

セックス (sex) vs. セクシャル (sexual)

ファックス (fax) vs. ファクシミリ (facsimile)

サククス (sax) vs. サキソフォン (saxophone)

同じ英語の尾子音でも、語末音節の尾子音は日本語において促音化し、非語末位置の尾子音は促音化しないという不思議な傾向に対して、英語の音声そのものに不均衡性を作り出す違いがあるという仮説と、英語を聞く側の日本語話者の知覚 (日本語の音韻構造) に原因があるという仮説の、二つの可能性が考えられる。この問題に対し、Kubozono et al. は英語の無意味語刺激を用いた音声実験 (音響実験と知覚実験) を行い、前者の仮説が妥当であると結論付けている。

最後に Sonu et al. の論考は「さっき～さき」のような日本語の促音・非促音の区別を日本語学習者がどのように習得しているかという問題を考察した。具体的には日本語を習得しようとする韓国語話者を対象に音声実験を行い、日本語学習者が日本語母語話者と異なる方策で促音の有無を同定しているということを指摘した。さらに、知覚訓練によって日本語学習者が促音・非促音の区別をかなりの程度まで習得できるということを報告している。

冒頭で述べたように日本語の促音は日本語学習者にとってもっとも習得がむずかしい音声特徴の一つである。にもかかわらず、日本語母語話者自身が促音の有無をどのようにして産出・知覚しているかという基本的なことが未解明のままである。日本語を母語とする赤ちゃんがこの音韻的対立をどのように獲得しているのかという問題に至っては、研究が始まったばかりと言っても過言ではない。促音をめぐる研究には課題が山積している。

## 窪菌 晴夫 (くぼその・はるお)

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学)。南山大学助教授、大阪外国語大学助教授、神戸大学教授を経て 2010 年 4 月より現職。

主な著書・論文：『The organization of Japanese prosody』(くろしお出版、1993)、『語形成と音韻構造』(くろしお出版、1995)、『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー 118、岩波書店、2006)、Varieties of pitch accent systems in Japanese (Lingua 122, 2012)、Japanese word accent (Oxford Bibliographies Online, Oxford University Press, online, 2013)。

受賞：市河賞 (財団法人語学教育研究所、1995)、金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会、1997)。

社会活動：日本言語学会評議員・常任委員、日本音声学会理事・企画委員長・評議員。